

A Christmas Carol について
Dickens の文学の中における ghost の働きについて (2)

On A Christmas Carol, In Prose, Being Ghost Story of Christmas
On the functions of ghosts in the stories by Charles Dickens (2)

嶋田 貴美子
Shimada Kimiko

キーワード：ghost, spirit, 貧困, natural, unnatural, spiritual, 俗物

7

Christmas Eve にもかかわらず自分が代表を勤める商会の仕事をこなして夜遅く帰宅した Scrooge が自宅のドアのノッカーに、ちょうど一年前まで共同経営者であった Marley の顔が一瞬現われたのを目撃してから、実際に Marley の ghost が現われそれから窓の外に立ち去っていくまでの Scrooge の目の前で次々に起った超常現象の記憶は、翌日の夜中深い眠りから覚めた Scrooge の意識をひどく混乱させるものとなった。そのような Marley の ghost によって引き起こされた得体の知れない不安感は、そもそも人間の肉体以外の内面の存在を認めようとはしなかった Scrooge が自らの身に知る限りにおいて、彼の人生途上で初めて経験したことであったのであり、そのように混乱している自分自身にいらだつのであるが、しかしその気持はどうにもならないのである。つまり Marley の ghost の来訪は Scrooge の中に固くこっていた spiritual な部分の溶解の兆しを創出することに成功したのであった。そしてそれこそが、Scrooge と同様に非人道的な貪欲さに徹して London の大商人として業界をのしていた Marley が、自分が死んでちょうど一年となる Christmas Eve に Scrooge の下に現われた一つの目的であったのである。Marley の ghost は人間たるものの尊厳を説くために、つまり人は結局土に帰って消滅してしまう肉体に存在意義があるのではなく、永久不滅の霊にこそ人が人たるゆえんがあるのでありその輝きは生きている間に、生身の人間同志の中でしか発現されないものであって、生前そのことをおろそかにした報いは死後の尽きることのない煉獄の苦しみとなって身に返って来るものであることをほんのわずかでも Scrooge に知らしめ気付かせるために、かつての盟友としての親切心から Scrooge の下を訪ねたのであった。

つまり前夜の邂逅で Marley の ghost は、Scrooge が Marley の ghost を目の前に見ていたにもかかわらず、それが自分自身の中の何かの disorder (変調) による illusion (錯覚) であって、この世での ghost の存在など信じることはできないと思っていることに対して、「なぜお前は自分の senses (感覚) を疑うのか⁽¹⁾」と言っているが、それほどにまで人々の営みのすべてについて功利的な唯物的な思考様式にこり固まり、人間の霊的なもの感覺的なもの、つまり人間の持つ spiritual な側面の理解を頑に拒絶していた Scrooge が、その後の深い眠りから覚めた後では、前夜の Marley の ghost の言動やまたそれがもたらした超常現象に非常に当惑し混乱している様は、Marley の ghost が目指した出現目的の効が十分に奏されたものと見ることができるのである。それは Scrooge が独特の正義の基準の下にそれまで気付かれもしなかった、Marley の ghost によって指摘された自分の中にある非道徳的な側面のかすかな覚醒でもあった。

Marley の ghost は Scrooge にしっかりと面しまず Scrooge の中に、その自分の存在に対する恐怖心を掻き立てることに成功する。成功の鍵はやはりその ghost の「死そのもののような冷たい目⁽²⁾」であったが、元来自己の中にある感情らしいものとしては怒りの他には何ものも持ち合わせておらず、喜びも悲しみも、もちろん愛も優しさもすべて自分の身の周りに寄せつけようとしなかった Scrooge が、Marley の ghost に対して恐怖心を抱いたこと、そのことの中に前段落でもみてきたような Scrooge の再生へのわずかな兆しが見え始めるのである。それでも Marley の ghost が去った後、Scrooge は Marley の ghost そのものと、その ghost がその夜展開して見せたもろもろの超常現象を、“ばかばかしい⁽³⁾” ことであると決めつける気持を完全に失ってはいない。それで次の夜 (Scrooge 自身 Marley の ghost が立ち去った夜の時間と自分が眠りから醒めた夜中の、Marley が約束した第一の ghost の来訪の時間の1時間前の12時というその時間のつじつまが合わないことに不信感を募らせていたのであるが、第2の ghost との邂逅も、第一の ghost が消えたあとの夜の眠りから目覚めた次の日の夜中のこととなっている)、12時に目覚めた Scrooge は、Marley の ghost と共にあるそれら一連の前夜の記憶はすべて dream であったに違いないと思う反面で、そう言い切れないものが気持の中に蠢き始めて、それが Scrooge を生まれて初めてひどく当惑させ混乱させたのであった。

そのように、怒り以外の感情はすべて枯渇してしまっている Scrooge の内面に掻き立てられた Marley の亡霊への恐怖心と共に、前夜の記憶がすべて dream であったと決めつけられずに悩む Scrooge の姿に、Marley の ghost との会逅を果たした前夜よりもう一步進んだ形での、固く凝っていた Scrooge の心の氷山の一角の融解を感じ、人間性回復への更なる希望をそこに見出すのである。しかし Marley の ghost が言ったように、Scrooge が現在の自分の生活態度の中における非道徳的な部分に対する罪を認め、それを悔い改め慈善の心を獲得するまでには、まだほど遠く、Marley が設定したように第1第2第3の ghost の出現が必要であることがわかるのである。

そのように自己の中において Dickens が裁定する sinner である特質に恐る恐る目が向けられ始めたものの、まだまだそれまで慣れ親しんできた自分の正義にしがみつこうとしている Scrooge にとって、眠りから覚めたあと Marley の ghost が予告した第1の ghost の出現時間ま

での1時間は、当論文の5章⁽⁴⁾に引用されているように、Dickens の小説あるいは“Sketches”に登場する criminal や sinner が感じた、15分間隔で時を告げる ST. Paul 大聖堂からの鐘の音に、刑の執行までの残された時間が刻々として削られていく思いと同じような居たたまれないほどの焦燥感にかられた恐ろしい時間となっているのである。そして鐘が1時を告げ「時間だ。でも何も起らないじゃないか⁽⁵⁾」と言ったとたん、またしても一連の超常現象が起ったのである。それは「Scrooge の過去の Christmas の ghost⁽⁶⁾」であった。

この「Scrooge の過去の Christmas の ghost」の属性のうち、このお話の作者である Dickens が最も重要視しているのは頭のとっぺんから、自らの存在を照らし出す唯一の手段として射しているこうこうとした光と、それからもう一つ、その spirit⁽⁷⁾ が小脇にかかえている帽子であろう。しかし Scrooge のような唯物論者にとっては価値があるものは現在目の前に厳然としてある現実的な物質のみなのであって、過去、それも自分の記憶の中だけにしか存在しない過去の Christmas の spirit などに拘泥することなど極めてばかげたことに思われるのである。特にその spirit の頭上から射している明るい光は、世の中の楽しいこと喜ばしいことから目をそむけて生きている Scrooge にはまぶしく目障りであったに違いない。その辺の心理状態については、「なぜそんなことをしたか尋ねられたとしても Scrooge は多分答えられなかったであろう⁽⁸⁾」という記述の中に見られる通り、Scrooge は無意識のうちに、spirit の頭上から射しているその明るい光の消灯器の役割を担っている帽子をかぶってくれとその spirit に頼んでいる。その時怒りをあらわにして言った spirit の言葉の中に、spirit の頭上から射しているその明るい光と、spirit が抱えている帽子との関係が明らかにされることになる。spirit は次のように言っている。

「何だって！お前は私が与える光を世俗にまみれた手で、もうすぐさま消してしまおうとするのか。お前たちの中の横しまな情熱がこんな帽子をこしらえて、この長い年月の間、この額のところまでま深くかぶるように私に強いてきたんだ。それでもまだお前は足りないともいうのか⁽⁹⁾」

つまりその光は、世俗の汚れを知らなかった子供の頃の natural なものを照らし出す至福の光であり、帽子は unnatural な世俗の汚れが凝り固まってできたものであるということである⁽¹⁰⁾。しかしその spirit の言葉の意味も、他の者の心理を推し測ることに極めて疎い Scrooge にとってはほとんど通じてはいない。それで spirit は、Marley の ghost の示唆とその第1の ghost の出現によって、功利的な物だけで成る世界の他にあるもう一つの spiritual な世界への認識が多少高まって幾分は緩められてはいたもののまだまだがんじがらめに世俗の欲に縛られている Scrooge を、有無を言わず力づくでまずはタイムスリップした Scrooge の生まれ故郷でのクリスマス日の、少年 Scrooge に向き合わせることから始める。

さまざまな思いや希望や喜びや、愛情などが香気となって満ちている故郷での子供たちの上機嫌で笑い合い、大声で互いに声を掛け合う賑やかさが「広い野原一帯に実に楽しい音楽となって満ち、ぴんと張りつめたような冬の寒空ですらそれを聞いて大声で笑っている⁽¹¹⁾」ような光景に接し、あるいは陽気に騒ぐ名前も知っているその中の少年達を見て、Scrooge の心についての間にかとめどない喜びがわき上がり、胸が踊り涙を誘っていること自体に Scrooge は我々が

ら驚きそして不思議に思う。更に Scrooge はその故郷の人々が “Merry Christmas” というのをきいて心に喜びを感じたのであるが、その瞬間 Scrooge は金銭的な欲望だけを追求している現在の自分の感情に立ち返り、「自分にとって Merry Christmas が一体どうしたというんだ。Merry Christmas などととんでもない！ Christmas がこれまで俺に一体何を儲けさせてくれたというんだ⁽¹²⁾」と開き直る。しかし、「Scrooge の過去の Christmas の spirit」が Scrooge を連れて行く先々で展開される、Scrooge の記憶の中に長い間思い出されもしないまま深く沈んだままになっていた少年時代の各場面は、その spirit によって Scrooge にしっかりと向き合わされた今、その一つ一つが Scrooge の胸に迫り、頑な Scrooge の心を和らげ、Scrooge の目からもはや何のちゅうちょもなくとめどない涙を誘い出すことに成功する。その後 spirit が連れて行った商人の老 Fezzwig の店での Christmas の舞踏会の様子は、かつてその家の奉公人であった Scrooge も含めた従業員のすべてを極めて大事にしたばかりか Christmas Eve には町の誰かれとなく接待してその店で開かれる舞踏会を最高に楽しいものにしようと身銭を切って努力したものであった Fezzwig 老人の寛大であった人柄を今改めて目の当たりにすることになり、今ではその Fezzwig 老人よりもはるかに大商人として London の business 界に君臨しているにもかかわらず、一連のこの過去の場面を見せられる前であったらきっと「このような愚かな者達にこんなに感謝されたって、別にどうってこともないじゃないか⁽¹³⁾」と思ったに違いない自分の生活態度に恥じ入り、Scrooge は次のような感慨を spirit にもらしている。

「彼 (old Fezzwig) は、私達を幸せにも不幸せにもする力を持っているのですよ。私達の奉公が軽くも重くも、楽しいものにも苛酷なものにもできる力をねえ。あの人の力が言葉の上や見かけ⁽¹⁴⁾にあるとしても、ほんのささいな取るに足らないとりたてて考慮するにあたらぬような事柄の中にあるとしても、だからって何でしょう。彼が与えてくれる幸せは、一財産かけてやってくれたと同じくらい大きなものなのですよ⁽¹⁵⁾」

次に spirit が Scrooge を誘導して行った場面は、成人し、実業家として世に出始めた頃の Scrooge とその婚約者であった若い女性とのやりとりのある場面である。そこでは貧しい生い立ちの Scrooge が、当論文の chap.2⁽¹⁶⁾ で述べてあるように富を貯えた商人が、貴族の階級ですらも金で買えるような当時のイギリスの貨幣万能の時代に London の大商人としての実力を持ち始めてその金の威力に取りつかれて人間としての本性を失っていく様が、その婚約者の口から語られるのである。つまり婚約者は貧乏であることの中にある労働の喜びと将来の幸福への希望や向上心などの人間としての気高いものが、貧しさによる世間からの恥辱を逃れたいという願望にすっかり取り込まれてしまっている当時の Scrooge に、そして更に願望の前には愛すらも無意味になってしまった Scrooge の内面的変化に失望して彼の許を去る。つまりその場面は natural と unnatural との人生の岐路に立っている Scrooge の懊悩の場面であると言える。この時に Scrooge が言っている「これが世の中の公平なやり方なんだ。貧乏人には最高につらく当たるくせに、富の追求となるとこれもこれ以上ないほど厳しく非難するより他にはないんだね⁽¹⁷⁾」という言葉も、子供時代から貧しいがための恥辱と苦労を十分に味わってきて、やっと

そこから脱却しようとしているまだ若き Scrooge ならではのものとして重くひびく。そして結局 Scrooge はその娘を追いかけはせずに、金への欲望に追随する道を選んだのである。

その後すぐまた spirit は、それから十数年後のその女性と彼女の夫、それから彼らの子供である美しい娘が作る慈善的な優しさと愛と、それから笑いに満ちた Christmas の日の快い家庭を Scrooge に見せる。特にその未来への希望に満ちた娘の優しさや美しさ、それに品位を持った陽気さに魅せられた Scrooge は、「あのような娘が自分を父と呼んでくれ、今の私の人生のようなやつれ果てた冬を生きているようなこの時期に、春の息吹をもたらしてくれたら⁽¹⁸⁾」どんなにいいだろうと思ひ目頭を熱くした。これは Scrooge の中に人間の自然の感情が湧いてきた現われであったが、あれほど金への欲望に凝り固まり、長い年月の間全くもって非人道的に生きてきた Scrooge にとって、spirit が Scrooge の前に展開する場面が自分の過去の正確な再現であればあるほど心理的な刺激が強すぎて、Scrooge はもうそれ以上の過去の場面は見せないでくれと spirit に頼まざるを得ない気持ちになる。しかしそれをなかなか聞き入れてもらえそうにない様子で Scrooge は、今や以前にも増してこうこうと照っている spirit の頭上の光に忍耐の限界を感じて、spirit の手から帽子をいきなりつかみ取りとうとう無理やりその spirit の頭にかぶせてしまったのであった。そしてこれが「Scrooge の過去の Christmas の ghost」の最後となった。こうして Scrooge が強引にその spirit を消してしまおうとした行為の中に見られるものは、過去の中にあつたそれ以上の natural なものをその場に臨んで再確認することを断固拒否し、そうした natural なものに真面向対立する unnatural な性格になおもしがみつこうとする以前の Scrooge の本性であり、Scrooge を死後の艱難から救ってやろうとしている Marley の ghost が意図したことであるそれらを融解させるまでの道のりは、まだまだはるかなものが予想され、Marley の予告通りに 2 番目の ghost として次の夜「現在の Christmas の ghost⁽¹⁹⁾」の、Scrooge の許への来訪の強い必然性をそこに見るのである。

8

Marley が Scrooge の許に送られると予告したこの第 2 の ghost は、自称「現在の Christmas の ghost」であったが、第 1 の「Scrooge の過去の Christmas の ghost」の風采が長い白髪を持った人のようでありながらその実小さな子供ほどの大きさであったのに比べて、「目にも燦然と輝く陽気な巨人⁽²⁰⁾」であった。そして第 1 の ghost が第七章で述べたとおり、頭のとっぺんから射しているこうこうとした光に照らし出されて初めてその存在が顕現するだけのものでは比して、この第 2 の ghost は存在感が大きく、彼の前には七面鳥やがちょう、あるいはその他の動物の肉、Christmas には欠かせない pudding、様々な果物、それに punch⁽²¹⁾ などがまるで王座を成すかのようにうず高く積み上げられていて、その第 2 の ghost は、「豊饒祭⁽²²⁾」の角の、盛んに燃えさかっているたいまつを高くかかげていかにも大らかさと寛大さと豊かさをぶんぶんと迎りに香らせているのである。その部屋はもちろん Scrooge の家の、Scrooge の寝室の隣の部屋であったが、何もなく陰気で殺風景であった部屋が、今では壁も天井にも生

き生きとした緑の葉が一面張りつめられている中に、ひいらぎややどり木⁽²³⁾などの Christmas の飾りつけが成され、さながら自然の森のように変っている。その親切で陽気できびきびとした巨人とその部屋の変化とは、Dickens が考えていた理想的なイギリスの伝統的な Christmas の在り方⁽²⁴⁾を描き出すと共に、裕福で身よりのない Scrooge の、Christmas として在るべき姿を示唆しており、また資本主義社会の長足の進歩のために、限りなく貧しい者も少なくない一方で、この上もなく豊かな Christmas を過ごすことのできる層も多い当時のイギリス社会、つまり大いに向上したイギリスの国力を象徴するものであると言えよう。

この「現在の Christmas の ghost」はやがて第一の「Scrooge の過去の Christmas の ghost」と同様に Scrooge をそこから連れ出し、まず当代のイギリスの Christmas の実態を Scrooge に見せ、庶民がそれぞれに Christmas を祝い楽しむ様子を Scrooge の共感を勝ち得るのであるが、「Christmas など何がめでたいものか、ばかばかしい!⁽²⁵⁾」と思っていた Scrooge が、Christmas の日にこのように浮かれ陽気に騒ぎ、大いに Christmas を祝おうとしている庶民にすっかり共感しているのは、その時共にみた第2の ghost の功績ではなくて、前日の夜第一の ghost よって強引に自分の過去の場面場面にしっかりと向き合わされ、抵抗しながらも Scrooge の心の中に知らず知らずのうちに引き起こされた感傷が、Scrooge の目に初めて熱い涙をもたらした、その効果によるものであったと言えるであろう。そして彼らがパン屋の店先に来て、たくさん貧しい人々が Christmas のごちそうを調理してもらうためにパン屋に入って行くのを見た時に、Scrooge はその現在の Christmas の ghost に人道主義的な立場から当代のイギリス社会での Christmas の在り方についての矛盾点をついつい吐露してしまうのである⁽²⁶⁾

その第2の ghost が Scrooge の更なる人間性の回復のため寄与した最も大きなことは、その ghost が Scrooge を次に連れて行った、Scrooge の商会の事務所で働いているたった一人の事務員である Bob Cratchit の家での Christmas の様子を Scrooge にとくと見せたことであった。当論文の chap.3⁽²⁷⁾に述べたように、Bob Cratchit の雇い人である Scrooge は週に 15 shilling という、当時の低所得者層の中でもかなり低い水準の給料しか彼にやっておらず、その給料の範囲で子供6人と夫婦が Christmas を祝うための食べ物、飲み物を用意するのにどう工面しているかということや、そして貧しいながらも「彼らは幸福であり、神に感謝し、互いに存在を認め合い、日々の暮らしに満足していた⁽²⁸⁾」ということに Scrooge は目を奪われるが、Scrooge が特に強い同情と関心を引かれたのは、Cratchit の一番下の息子の、体も小さく虚弱な上に松葉杖にすがらないと歩くことができない Tim 坊やで、その子がいかに純真であり、又 Bob の家族に愛されているかということ、特に Bob 自身の Tim に対する愛の深さに圧倒され、Scrooge は ghost に促されて Bob の家を離れるまで Tim から目を離すことはできない。そして自分の傍に立っている ghost に「Tim 坊は元気になれるでしょうか⁽²⁹⁾」ときき、その ghost が「わしの目には暖炉の角のところに空っぽの椅子と、使い手を失くした松葉杖が大切に保管されているのが見える。もしこの影が将来にわたって変ることがなかったら、あの子はきっと死ぬだろう⁽²⁹⁾」と言った時、「どうかお願いします。親切な幽霊様、あの子はきっと元気になれると言って下さい⁽³⁰⁾」と嘆願せざるを得ない気持ちに Scrooge はなっている。しかしこの Tim 坊に免じて Bob の給料

をほんのわずかなりとも上げてやろうという気持は今はまだわいてはいない。それでもかつて Christmas の慈善事業で教会関係者が寄付を仰ぎに Scrooge の事務所に来た時、Scrooge が言った言葉を ghost がそのままねて、「もしあの子が死ぬようなことになったらその方がいいのではないか。余分な人口を減らせるのだから⁽³¹⁾」と言った時には Scrooge は「首をうなだれ後悔と悲しみでいっぱいになった⁽³¹⁾」のであった。spirit が口真似したこの Scrooge の言葉は当論文の chap.3⁽²⁷⁾ の中のその部分の注に詳細に述べてあるように、これは経済学者の Malthus が言った主張であり、それに対して Dickens が大いに憤りを感じたその義憤が、強欲の化身であったと共に何よりも強力な金権を手にして驕り高ぶり、貧しい人々やそのように障害を持った者達の事に配慮を欠いていたどころか、彼らの人格をも認めようとしなかった傲慢さを良しとしていたかつての Scrooge 自身の言動に、Marley の ghost、第 1 の ghost との会近を経て第 2 の ghost と共にある今の Scrooge は、大きな後悔と懺悔の気持とをしみじみとかみしめることができるようになったのである⁽³²⁾。

Bob の家を離れてからその ghost は、貧しい庶民の家々や、荒涼とした沼地にある抗夫の家、又岸边から遠く離れた荒々しい海の中の岩礁に立つ灯台守の家、あるいは海の上を走行する船に乗っている人々が年に一度の Christmas をどのように考え、どのように楽しみ祝おうとしているかを Scrooge にしっかりと見せる。ghost はこうすることによって更に、「貧乏人にとって Christmas の何がめでたいのか、ばかばかしい」と言っていたかつての Scrooge の考え方の中にあつた非を重ねて認めさせ、資産のある者が持たなければならない人道的な Christian としての意識に目覚めさせようとしたのであった。それを意識させる上での仕上げとして ghost が Scrooge を最後に連れて行ったのは、これも当論文の chap.3⁽²⁷⁾ に述べてある、Scrooge の現在唯一人の身内である甥、つまり死んだ妹⁽³³⁾ の一人息子の Fred の家で行なわれている Christmas party の場であった。Fred は金への欲望の殻に閉じこもり、孤独なわびしい Christmas しか自らに許そうとしない Scrooge 叔父を哀れみ、貧しいながらも神をたたえて賑やかで笑いに満ちた自分の家での Christmas の祝賀 party に Scrooge を何とかして招こうと Eve には毎年必ず Scrooge の所に招待の言葉を携えて訪ねて来るのであったが、Scrooge はいつもうそういう Fred の親切さを揶揄しその申し出を真っ向拒否していたのだ。しかし今 Scrooge は Fred の家に集う若者達と共に音楽をきき、彼らの遊びに加わり、時の経つのも忘れるほど楽しんでいる。その時の Scrooge は思いの中に、「時には子供に戻ることは良いことだ。それもあの偉大な創始者 (Founder⁽³⁴⁾) が子供だった Christmas の時が一番いい⁽³⁵⁾」という感慨を抱く。Fred はもともと、優しく愛らしく Scrooge 兄を心から愛してくれた妹の子供であり、Fred の家のその場では妹につながる子供の頃を思い出させるものが多くて、その中に浸ることに Scrooge はかつてなかった限りない幸福感と安心感を抱いたのである。そしてその第 2 の ghost と共に居る間に、最終的に Scrooge は、その「現在の Christmas の ghost」が人々に与える功德をしっかりと見届けることになったのである。つまりその ghost の介添えによりすべての者が幸福になり、「その ghost が寝ている病人の傍に立つと彼らの病は軽快し、外国に居る者の側に立つと、彼らは家に帰り、苦しんでいる者の側に立つと彼らは大きな希望の中に辛抱強くなった。

貧しい者は豊かになり、救貧院や病院や牢獄や、……みじめな者達が行くあらゆる隠れ家では、彼は祝福を与えた⁽³⁶⁾」のであった。しかし命が尽きるというその夜の最後に、その「現在の Christmas の ghost」は彼の力ではどうにもならないものを Scroogeに見せている。それは二人の子供であった。その子供達について *Carol* の中では次のように描写されている。

貧乏でみすぼらしく、不愉快で悲慘に満ちた子供たちだった。彼らは幽霊の足下にひざまずき、上着の外側にしがみついていた⁽³⁷⁾。

彼らは少年と少女であった。肌は黄色くやせこけて、ほろをまとい、しかめ面をして貪欲そうである一方で、いじけていた。目にも優美な若さがその顔を満ちし、生き生きとした色調で色どられるべきだったのに、老人のようなしなびてしわだらけの手が、彼らをつねりひねって彼らをずたずたにしてしまったようだった。天使が玉座を占めるべき所に、悪魔が潜んでいて、威かくするような目でにらみつけていた。人格のどんな変化も墮落も逸脱も、このすばらしい創造の神秘の粋を尽したものであれば、どの程度のものであろうともその半分ほどの恐ろしく身の毛のよだつ怪物は作り得はしない⁽³⁷⁾。

ghost は彼らについて更に次のような説明をしている。

「この子供達は父親の許から逃げ出したくてこうして私にしがみついているのだ。この男の子は『無知⁽³⁷⁾』で女の子は『欠乏⁽³⁸⁾』だ。この二人には気をつけなさい。この子供達の仲間の者達、特にこの男の子には注意しなさい。今だまだ書かれたままになっているとすれば、この子の額には『滅亡⁽³⁹⁾』という字があるはずだ。否定しようというのか！ そう書いてあるとはっきり言う者をそしろうとするのか！ ただ扇動的な目的のためにだけそれを認めて事態を更に悪化させるならそうするがいい⁽⁴⁰⁾」

ここにおいて Dickens は、その子供達のそれぞれが象徴している『無知』と『欠乏』という当代のイギリスが直面している二つの社会問題に読者の注意を引くことを意図しているのがわかるのである。つまり当代のイギリスの教育の貧困と、社会に蔓延している経済的な貧困とに対してである。まず第一の教育の貧困についてであるが、「宗教的 sect が宗教教育の本質がまず規定されるべきことを主張していたがために、公教育条令法案の可決が遅れていることに Dickens はかねがねやっきになっていた⁽⁴¹⁾」のであったが、人が人たる権利である公教育⁽⁴²⁾の大切さに、大して重要性を見出すことのできない当代の功利的社会の中に潜む計り知れない危険と未来の社会における報いをこのような形で Dickens は糾弾しているのである。そしてその女の子が象徴している『欠乏』についても、これは彼ら二人の子供が共通してみすぼらしい身なりをし、幼いながらも社会の辛苦にさらされ子供の持つ純真さのすべてを失い老人のようにやつ果ていじけた姿をしていることからわかるように、それはその少女だけに限ったものではなく、大人も含めた当代社会全体についての言及であろう。しかし Dickens がその女の子に『欠乏』の文字を与えたのは、そうした社会の貧困や欠乏の影響を最も受けやすいのは子供達であること⁽⁴³⁾を強調し、そして更にここに現われ出た子供達の様子は、働いて金を得ることだけに価値を見出ししていた当代の資本主義社会がいかに子供を虐待していたかということを示すものでもあろう。そして特に庶民の子供達がこのまま公教育が受けられずに成長した暁には、国は『滅

亡]への道をたどるのみであるという Dickens の強い警告もそこに見ることができるであろう。このように「現在の Christmas の ghost」の衣の下から現われ出た二人の子供が「無知」と「欠乏」であり、額に「無知」と刻まれている少年と「滅亡」が刻まれている少女というこの象徴的なことの意味を Dickens は、フランス革命⁽⁴³⁾を背景においた自らの小説 *A Tale of Two Cities* の中でより具体化させているのを見ることができる。貴族の専政のための住民の蜂起であるフランス革命の勃発の地であった Saint Antoine 界隈の悲惨な様子について Dickens は、そこは「寒さと不潔さ、疾病、無知、欠乏⁽⁴⁵⁾」とが満ちあふれていたと描写している。そしてさらに「それらの中でも最も極立っているのが欠乏である⁽⁴⁵⁾」とし、これは「若者達を碎いて老人にする⁽⁴⁵⁾」のであり、それによって「子供達までが老成した顔付になり、声も低い深刻ぶったものになっていた。そして子供達の顔には、大人達の顔もそうであったが、……『飢え⁽⁴⁶⁾』の烙印が押しあつた」と記述している。つまり Dickens は社会の中の「無知」と「欠乏」つまり「飢え」がフランスをカオスの状態に陥れたフランス革命の原凶であり、それらを解消することが安定した社会を築くための急務であるというのである。このように「現在の Christmas の ghost」の被護の下でしか生きていられないこれらの子供を見て Scrooge は少なからず彼らに同情し、「この子供たちは寄辺も生きるすべもないのかね⁽⁴⁷⁾」と思わず ghost にきくが、ならば自分が彼らの後見人になろうというような積極的な提案をするほどにまではまだいたっていない。もはや老境にさしかかっている Scrooge が、大きな富を貯えたそれにふさわしい完璧に人道的な商人になるためには、彼をもう一押しする第3の ghost、つまり「未来の Christmas の ghost」の Scrooge の許への来訪と導きの必要性和意義がここにあるのである。

9

そのようになんかの程度まで人間性を回復し、以前の彼とは似ても似つかないほどにまで素直で寛大な心理状態になっている Scrooge にとって、第1、第2の ghost 出現までにはぐっすり眠りこんだ上で目覚め到来を待つまでになんかの時間を要したのに比べて、第3のその最後の ghost の訪問までの休息と時間はもはや必要ではなく、そのためその最後の ghost は第2の ghost が消えると同時に Scrooge の所に現れる。それでも Scrooge はまだ犯罪者の心理の片鱗はあり、一貫して押し黙ったままのその ghost に大きな恐怖を感じ、「頭も顔も、体の何もかも」を覆い尽くしている真黒な衣の背後に「自分をじっと見据えている気味悪い目があるのだ⁽⁴⁹⁾」と思った時、Scrooge は新たなぞっとするような恐怖に襲われている。しかし Scrooge 自身、「生まれ変わった人間として生きていきたい⁽⁴⁹⁾」という希望を抱いているために、その第3の ghost には Scrooge は極めて従順について行こうとしている。Scrooge の心理状態をもう少し具体的に言えば Scrooge は「将来の自分自身の生きざまが今自分が欠けているものが何であるかということを知る手がかりを彼に与え、それを難なく解決してくれる手だてとなるであろうという期待を持っていた⁽⁴⁹⁾」のであった。それで Scrooge は見えない目 (Unseen Eyes) に脅えながらも、ghost の誘導のままにまず町の中心地にある、Scrooge の商売の拠点であった商取引所に行

き、そこに出入している商人達の会話に聞き入ることになる。彼らは彼らの商売の上での重要な人物の死について語り合っているがその死に同情は全くない。その後彼らは賑やかなその街を離れ、「道はひどく不潔で狭く、店も家もさびれ果て、人々は半裸でのんだくれ、だらしのないひどい有様をしている⁽⁵⁰⁾」場末に来る。「その路地やアーチ道は、たくさん集められた下肥溜から発せられるようなむっとする悪臭や、汚物やそこにある生活とを吐き出していた。そしてその一角は総じて犯罪と不潔と悲惨とが満ちていた⁽⁵⁰⁾」のであった。これは Dickens が彼のどの小説においても多少なりとも描写している London 郊外の貧民窟の有様である⁽⁵⁰⁾が、こうした貧民窟に付きものであるのが質屋⁽⁵¹⁾であり、Scrooge と ghost とはその質屋にやって来る。その質屋の店先に見られるものは鉄、ぼろ布、空きびん、骨の類い⁽⁵²⁾、脂ぎったくず肉などであり、「床にはさびついた鍵、釘、鎖、蝶番、やすり、量り、分銅などあらゆる種類の鉄屑が高く積み上げられ⁽⁵³⁾」ている。*Oliver Twist* の小説に詳細に述べられているように、質屋は矛盾の多かった当時のイギリス社会の中では必要不可欠のものであり、特に貧民街のそうした質屋は一時の飢えをしのぐために必要なわずかな金を手に入れるために、手当り次第にあらゆる物売りそして買って行く所であり、人間の尊厳がぎりぎりの所まで追いつめられた人々の集う所であったのである。

Scrooge と ghost はここでその質屋に出入りするのにも最もふさわしい、いかがわしい風采をしている客がその質屋に入って来て持って来た質草を質屋の主人に見せ値ぶみしてもらうのを目の当たりにする。彼らが持って来た物は印鑑や筆入れ、一対のカフスポタン、大して価値のないブローチ、敷布、タオル、ちょっとした衣服、旧式の銀の茶さじ2本、それから寝台のカーテン、毛布等であった。それらはある死者の許から盗み出しあるいははぎ取って来たものであった。死者に対して何の悪びれた様子もなく、その死者を悪しざまに言い合いながらもそのようにして死者から分取ってきた質草に対して質屋の主人から金を得て得々としている彼らの様子に、Scrooge は「例え彼らが死体そのものを商う忌まわしい死体販売人であったとしても、それ以上のものはないであろうと思われるほどの激しい憎しみと嫌悪の情を彼らに抱いたのであった⁽⁵⁴⁾。」しかしぱっと変わった次の場面で Scrooge は死してなお、そうした貧民にすら蔑まれ、むき出しの寝台に何もかもはぎ取られ、番をしてくれる人もなく死して無残に横たわっているその男の姿を目の辺りにする。当時の社会の主流であった宗教的な概念からして、それは人間の死に際してのまさに考えられないというより決してあるはずのないほどの悲惨な人の最後であったのである。

それから Scrooge は ghost によって Tim 坊やの死を嘆き悲しんでいる Bob Cratchit の家に連れて行かれる。虚弱体質な上に足が悪く常に家族の介添えを必要としていた6人兄弟の末子の Tim ではあったが、Bob の家族の中における存在意義の大きさについて Scrooge は、その前夜「現在の Christmas の ghost」に連れられて Bob の家に行きしっかりと認識したばかりであったのだ。そして今死してなお Tim の存在が Bob の家族の間に愛を深め、さらに家族の絆を深めているのを見て Scrooge は、「Tim 坊の魂よ、おまえ達子供の本質は神に由来するものである⁽⁵⁵⁾」という感慨を深めるのである。これは人道主義者 Dickens の児童観を示す最も端的な言

葉であるが、人が肉体と霊魂 (spirit) とで成っていること、つまり人とは地に帰る部分と神に属する部分とで成っていることを信じず、自分に対して具体的な利益として置きかえることのできない過去の記憶もまた愛も喜びも悲しみも、精神性のもののすべてを身の周りから拒絶し、従って Marley の ghost すらその存在が「ばかばかしい」ものであった Scrooge が今、いたいけな身障の子供である Tim の死に際して、このような厳かな言葉を吐くようになって、Marly の ghost を初めとする第1第2第3の ghost の、Scrooge を“改心させる”役割はすべて終わったことを確認する。そして最後の最後に第3の ghost は彼が見せた場面で話されていた“死者”とは Scrooge 自身であることを示唆するために、これまでのままだったらそうなるであろうと予測される Scrooge の墓に Scrooge を連れて行く。「家に囲まれ到るところに雑草がはびこり、……余り埋葬者が多いので窒息しそうな⁽⁵⁶⁾」墓地であったことからすると、そこは身寄りのない者がただ便宜的に埋葬されるだけの集団墓地であったのかもしれない。そのように打ち捨てられている自分の墓の前で Scrooge はその「未来の Christmas の ghost」の手をつかみ、「私はこれから必ず心から Christmas を称え一年中その気持を抱いていくつもりです。私は過去と現在と未来の幽霊様のお導きの中に生きていきます。この三人の幽霊様は私の中でござって拮抗していくことでしょう。私は彼らが教えてくれた教訓をこれからよもや締め出すようなことは致しません。ああお願いします。この墓石に刻まれていることを拭い消してもよいと言って下さい⁽⁵⁷⁾」と懇願している。これに対してその ghost はすごい力で Scrooge の手をふり放す。もともとその第3の ghost はまっ黒な上着に体をすっぽりと覆い尽くしただけ白い手が見えているだけで、冗舌だった「過去の Christmas の ghost」や「現在の Christmas の ghost」とは対照的に全く口をきかないで、もっぱら唯一それとわかるその手の動きが彼の意志表示の手段であったことを考えると、彼が消える直前の、すがりつく Scrooge の手を大きな力で振り払うというその行為の中に、Scrooge の未来にある生やさしいものではない課題の暗示を見る思いがするのである。

翌朝目が覚めた Scrooge は寝台も部屋も自分のものであるが、「その中でも何よりも良いこと嬉しいことは、自分の目の前には『時』があり、これまでの罪の償いができることだ⁽⁵⁸⁾」という感慨をまっ先に抱いている。それから「こうなるぞ」と未来の Christmas の ghost によって「示された諸々の事柄のあの影も」その「時」の中で「全部追い払ってしまえるかもしれないんだ。追い払えとも。きっと追い払えとも⁽⁵⁸⁾」と言っている。更に笑ったり泣いたりしながら、「どうしたらいいのかわからないのだ。わしの心は羽毛のように軽くて、天使のように幸せでそして小学生のように愉快だ。みんなクリスマスおめでとう。世の中の人達よ、新年おめでとう。おおい！わーい！おおい！」と言う。そして自分の部屋をあちこち歩きながら各々の ghost が入って来た戸口や ghost が座った場所あるいは Marley の ghost に示されたさまよえる亡霊たちを見た窓辺を確認し、「何もかもその通りだ。あれはみんな本当のことだったのだ。本当にここで起ったことなのだ⁽⁵⁸⁾」と言い、「ははは」と笑ったのであったが、その笑いについて Dickens は、「それはすばらしい笑い (splendid laugh) であった。記念になるほどのすばらしい笑い (illustrious laugh) であった。これからずっと長い長い年月繰り返される輝かし

い笑い (brilliant laugh) の開祖 (father) となるべき笑いであった⁽⁵⁸⁾」と描写し、Marley の ghost を始めとする各 ghost が大変な労力を注ぎ徐々に Scrooge の中に再生させた spiritual なものの大きさを示すのである。そういう Scrooge にとってもはや ST.Paul の鐘の音は「これまできいたこともないような晴れやかな⁽⁵⁸⁾」ものであり、「何と厳かなことよ⁽⁵⁸⁾」と讃嘆の声を上げ彼はそれに聞きほれるのである。そしてその朝が Christmas 当日の朝であることを知ると、鳥肉屋から一番大きな最良の七面鳥を人に頼んで届けてもらい、Bob Cratchhit に匿名で送ったのである。その後最上の晴れ着を着て町に出てあれほど「ばかばかしい」と言っていたつばねてきた “Merry Christmas” とする言葉にこの上もない楽しい音の響きを感じ取る。更にまたその夜の前夜 Scrooge の事務所に貧しい者のための Christmas の Charity で寄付をお願いしに来たのに、剣もほろろに追い返した教会関係の紳士達に街の通りで会うとすぐさま Scrooge は前言の無礼を詫びて大口の寄付を申し出ている。その後たった一人の身内である Fred の所に行き、「現在の Christmas の ghost」が彼に見せたものとそっくり同じ Christmas の賑やかで心のこもった楽しい Christmas の party に参加するのである。そのようにして今やすっかり生まれ変わって、貧しい者も富んだ者も含めた、世の中のすべての人にとって Christmas が年に一度の厳粛かつ楽しい特別な日であるということの認識を深めた Scrooge は、この日取りあえず、前日の Eve の日に自分の事務所にやって来た人々に対して自分が犯した、神をないがしろにした非道徳な罪の償いに奔走したのであったが、彼の改心のより明白な証しは Bob の給料を上げそして Bob の家の Tim 坊には第二の父となったことである。そうして Scrooge は善行を積み、生涯を通じて人道主義者として生きたのであったが、この Scrooge の晩年の姿に Dickens は人間の理想の姿を重ねるのである。

このように美しく理想的な状態で Scrooge の悔いの改めは成ったのであったが、それには sinner あるいは captive である Scrooge への Dickens の制裁の手段が最も適当なものであったということが言えるであろう。つまり Dickens が Scrooge の許に送った総勢四人の ghost は、あるいは恐ろしい形相で、又その存在の不気味さで、あるいは生気のないうつろなその目の凝視で Scrooge に激しい恐怖の観念を抱かせつつ、それぞれが分担してまず過去の、自然に生きていた頃の自分を想起させ、次に現実の自己の不自然さを認識させ後悔の念に陥らせながら、将来の自分の姿への危機感を抱かせるという罰を Scrooge に与えたのであった。しかし *Christmas Carol* の第一章の初めに描かれているように、“金”の魔力が、人間が人間たるゆえんである霊的なあるいは精神的な側面、すなわち神性を持った natural な側面のすべてを侵し、孤独な中に“金”にしがみついていただけの、極端に人間性が疎外されている London の商人であった Scrooge が、Christmas Eve の夜中に四人もの ghost の来訪という世にも不思議な体験があったからとは言え、一夜のうちにそれもまた誰にも真似ができないほどの理想的な人道主義者となったという story の運びは、大人の目には戯画的に映るのは止む得ないことである。これは *Christmas Carol* が Christmas の日に子供が暖かい炉辺に座って読み切る童話として書かれた短篇であって、大人の好む理屈よりも象徴性を持ち視覚的で非現実の中で現実を説き明かすファンタジー童話独得の特質からきているものであるからであろう。Scrooge がもはや老境にも達せんとする

境涯にある人であればなおさらのこと、人間はそんなに簡単に生まれ変わるものではないが、しかしそれが、すべての人が自分達の創造主であり、従って自分達の持つ精神性の源である神と向き合い称えるという Christmas のその日のでき事であったというところに、それを不自然と感じさせない強い説得力が *Christmas Carol* のその story 中にはあるのである。「若きエンゲルス⁽⁵⁹⁾ がイギリスで発見したこと、それは『都市に満ちあふれているあらゆる文明の驚異を実現するためには、自分たちの人間性の最良の部分を犠牲にしなければならなかった』ということであった⁽⁶⁰⁾」が、それはエンゲルスではなくても当時の知識人の誰もが発見し感じ取ったことであろう。しかし誰でもが感じ取っていながら黙認することしかでき得ずいた未曾有の国力の増強の陰に病んでいたこのイギリス社会の病理を、醜悪に陥ることなく fantasy として子供にもわかる形でそこに赤裸々に描き出し、警告を与えた最初の物語であるところにこの story の類まれな価値を見い出すことができるのである。その後 Dickens はこの Carol の中で言い尽くせなかった部分の完結を期して、Scrooge の金の亡者的な性格とごうつく張りの特質をさらに敷衍させた Dombey 氏が主人公となる大人向けの長篇小説 *Dombey and San* を書くのである。Carol の中では Scrooge 自身が極めて現実的な性格の持ち主でありながらその奇異さにおいてすべてにその story の最初から fantasy 的な雰囲気を持っていて彼の存在そのものにあいまいが感じられたのに対して Dombey の identity は明白であり、彼は Dombey and Son 商会の二代目で、東インド会社との取引もしているほどの、London の大商人の中でも屈指の大商人である。しかし Scrooge と同じく人間性に欠け、愛の権化のような娘 Florencea を疎外し、家から追い出してしまったりする。彼の生涯の一切が Scrooge と同じく功利的な考え方の下に推移し彼は増々権力を強めて行くが、それ故に彼もまたついには Scrooge と同じように sinner 又は captive として Dickens によって裁かれなければならない運命をたどることになる。Dombey への裁きは、自分の次代を担い商会の命運がかかっていた息子の Paul の死から始まり、後妻の派手な生活と、商会に於て Dombey の片腕ともなっていた直属の部下と彼女との駆け落ち、それから自分の商船の洋上での難破などなどへと移行して、結果として Dombey は商会そのものと商会に属するすべての物を失い遂には自分の住む豪邸までも失うことになるのである。かつて Dombey にあれほどの威厳と権力と周囲からの敬意とを与えていた“金”がそのようにたちまちに剥奪されて初めて Dombey は、Carol の中で「未来の Christmas の ghost」によって見せられた死の床に横たわる未来の Scrooge のあの場面さながらに、優しい言葉一つかけてくれる者もなく孤独のうちに打ち捨てられているのに気付く。そのようにして行き場を失くした Dombey を救ったのは、貧しい船乗りと結婚していた娘の Florence であった。そして Dombey は Florence の愛の中に過去の自分を懺悔し、貧しいながらも Florence の子供の祖父としての幸せを見い出すのである。

この Dombey の悔い改めの姿と Scrooge のそれとを比較してみると、Dombey には人生の敗者としてのたそがれの不安があるのみであるのに対して、Scrooge の悔い改めには未来への夢と期待と希望、喜び、楽しさなど、人が持ち得る善なるもののすべての展望が開けていることが明白にわかるのである。これは Scrooge の悔い改めが彼自身何も失うことなく、Scrooge 個人の

内面の中ですべて行なわれたからであって、その内面に帰属するものとしてそれを達成せしめた四人の ghost の力は偉大であり、そこにこそこの *Christmas Carol* にはその究極の存在である神を称え Christmas の日の Carol (聖歌) として今もなお不朽の地位を確保している大きな理由であるのであって、又逆に言えばこの *Christmas Carol* の story が博した Christmas の Carol としての大成功があるのである⁽⁶¹⁾。

注

- (1) *Christmas Carol* STAVE ONE Marley's Ghost "Why do you doubt your senses?"
- (2) Ibid. 特に death-cold eyes
- (3) "Humbug!" これは Scrooge の社会的な通念すべてに対する拒否の口ぐせである。
- (4) 当論文第五章 上田女子短期大学紀要 32 号
- (5) *Christmas Carol* STAVE TWO THE FIRST OF THE THREE SPIRITS "The hour itself, and nothing else!"
- (6) "Ghost of Christmas past"
- (7) *Christmas Carol* の中では幽霊、亡霊を現わす言葉が所により種々異なっている ghost という言葉は *Carol* の本の副題の中にも表われている極一般的な言葉であるが他は spectre, apparition, phantom, spirit などである。Marley の幽霊は主として ghost の言葉が当てはめられ第一の幽霊、第二の幽霊、第三の幽霊には主に spirit という言葉が当てはめられているが、それらは時に応じて他の言葉に置きかえられることがある。
- (8) Ibid.
- (9) Ibid.
- (10) 作者 Dickens の natural なもの unnatural なものの区分については当論文の chap.1 (上田女子短期大学紀要 31 号) の注 15 参照
- (11) Ibid.
- (12) Ibid.
- (13) Ibid.
- (14) Victoria 時代にはやっていた骨相学なるものからすれば、骨相学者は頭蓋骨を 40 何か所かに区分し、それぞれが精神的な、又は道徳的な思考の機能を持っているが、慈善家的思考は額の最上部にあるとされている。Fezziwig 老人は一見してこれを持っているように思われたのであった。
- (15) Ibid.
- (16) 上田女子短期大学紀要 31 号 (2008 年 2 月)
- (17) Ibid.
- (18) Ibid.
- (19) the Ghost of Christmas Present
- (20) *Christmas Carol* STAVE THREE、THE SECOND OF THE THREE SPIRITS
- (21) レモン汁、砂糖、ぶどう酒などの混合飲料
- (22) Plenty であるが一応豊饒祭として訳しておいた。Gost of Chrismas Present が豊かな食料をも表象するものであるということであろうか。
- (23) クリスマスの飾りとして必ず使われるもの
- (24) Dickens の考えていたイギリスの伝統的なクリスマスは domestication (家庭中心) と bourgeoisification (中産階級化) とであった。(Christmas Carol の Introduction の注 11)
- (25) *Christmas Carol* STAVE ONE

- (26) イギリス議会議員であった Andrew Agnew 卿は、1832 年から 1837 年にかけて日曜順守法案 (Sunday Observance Bill) の導入を繰り返し繰り返し計っている。この法案は日曜日にはパン屋は店を閉め富裕階級の主催でない限り、人々の娯楽の多くのものを禁止しようとしたものである。1836 年 6 月に Dickens は『Sunday Under Three Heads』というパンフレットの中で Andrew を攻撃している。……この中で Dickens は日曜日にパン屋から一人の労働者が出てくる様を描いている。
- (27) 上田女子短期大学紀要 31 号
- (28) Christmas Carol STAVE THREE
- (29) Ibid.
- (30) Ibid. “No, no,” said Scrooge, “Oh no, kind Spirit! Say he will be spared.”
- (31) Ibid.
- (32) この時言ったその ghost の言葉が「人口論」の中で Malthus が言ったこの言葉に対する Dickens の怒りの真髓であろう。Gost が言った言葉を次にあげる。「人間よ、お前の本質が石でないのなら、『何が余計なものか』『それは一体どこにあるのか』をはっきりと見定めるまではそのような忌まわしい言葉を慎むがよい。どんな人間を生かしどんな人間を死なせるかということをお前が決められるとでもいうのか。神の御前においてはお前などこのような貧しい人間の子供のような何百万人も無力な者達より生きる値打もなくその資格もないということもありうるのだ。おお神よ、葉っぱの上にいる虫けらが、塵の中で空腹にあえぐ同胞を見て命が多過ぎるなどと言っているのを聞こしめたまえ!」
- (33) Christmas Past に示された貧しく家庭的にも幸せでなかった Scrooge の少年時代において、唯一人この妹だけが Scrooge にあふれる愛で接してくれている。
- (34) キリストが生まれたことを流れ星で知った東方の博士達はその誕生を祝ってキリストの所に送り物をしたことが Christmas の起源と言われている。
- (35) 「子供に戻る」ということは、Wordsworth の詩に見られるように、子供の中にある natural な状態を取りもどすこと、つまり人間の究極である神性に強く目覚めることであるという Dickens の思考様式の記述である。
- (36) Ibid.
- (37) Ignorance
- (38) Want
- (39) Doom: (キリスト教) 世の終り (神の人類に対する) 最後の審判
- (40) Ibid.
- (41) Christmas Carol NOTES No.55
- (42) 私的な教育機関はかなり発達していたが、そこでは宗教教育とラテン語などが主たる学科で、実用には供さず、ブルジョアの子弟を対象としていた。
- (43) フランス革命: 1789-99 年にフランスでブルボン王朝の王政下にあった市民が、啓蒙思想の影響、アメリカ合衆国の独立に刺激されて起したブルジョア革命。バスティーユ襲撃に始まり、人権宣言の公布、立憲君主制の成立を経て、92 年に第一共和制を樹立し、翌年ルイ 16 世を処刑、ジャコバン派による恐怖政治、テルミドール反動後の総裁政府の時代を経て、ナポレオンの政権掌握により終結。
- (44) A Tale of Two Cities by Charles Dickens: 1859 年刊
- (45) A Tale of Two Cities chap5.
- (46) 『飢え』: hunger
- (47) Christmas Carol STAVE THREE
- (48) 1830 年～40 年にかけてのイングランドおよびウェールズの死亡率は「上流および中流階級は比較的低い」が「労働者階級の乳幼児死亡率は貧困と医療に対する無知とから極端に高く、また成年男女の死亡率も、劣悪な住宅および職場環境や、粗衣粗食のために虚弱となった体質に長時間の過度労働が強いられた結果……きわめて高かった。」(「世紀末までの大英帝国」長島伸一著 法制大学出版局 1987 年 4 月 20 日)

(49) *Christmas Carol* STAVE FOUR

(50) この *Carol* の story は短篇のため極簡単な描写しかしてないが、当時のそうした貧民街は「街路そのものはふつう舗装されてなく、でこぼこだらけで、汚く、動植物質の廃物でいっぱいとなり、排水溝も下水溝もないが、その代わりによどんで悪臭のする汚水たまりがある。街路では市が開かれるが……野菜や果物を入れた籠や、肉屋の店からは実に不快な臭気が発散している」（前述「世紀末までの大英帝国 p132）それから貧民街につきものの「のんだくれた（drunken）人々」が路上に寝ている様についてであるが、安いジンが手軽に手に入るようになったことから、貧民層に広く普及し「健康」「道徳心」「理解力」に対する「害毒」を説いた人もいたが、「飲酒の習慣はいっこうに改まる兆しを見せなかった。」「アルコールに対する熱い要求を抑制することは、飢えと貧困にあえぐ下層階級にとっては至難のわざであったようである。」（世紀末……」 p80）

(51) 質屋：「庶民相手の大規模な質屋は、まさに産業革命の落し子であったといつてよい。……都市の生活では貨幣が万能薬の効能をいかんなく発揮し、貨幣がなければ快適に過ごすことはできなかった。……この時期の都市生活において、質屋は庶民金融機関として必要不可欠な存在となっている。

(52) 骨；bone がどうして質屋で売られているかということについて、薬に使われたのではないかと言う人もいる。

(53) *Charol* STAVE FOUR

(54) Ibid.

(55) “Spirit of Tiny Tim, thy childish essence was from God!”

(56) Dickens は、当時のロンドンの主たる恥ずべきこととして超満員の市営墓地を見ている。

(57) Ibid.

(58) *Charol* STAVE FIVE

(59) 当論文 chap2 の注 (19) 参照

(60) 当論文 chap2 の注 (20) 参照

(61) *Christmas Carol* は 1843 年 12 月 17 日初刊本が刊行されたが、クリスマスイブまでに 5,000 部を完売した。この大成功のデビュー以来続々と版が重ねられ途絶えることはなく、それはヒイラギややどり木、クリスマスツリー、クリスマスクラッカーなどのようなアングロアメリカンクリスマスの重要な調度品となっている。（*Christmas Carol* Introduction）